

桐蔭文学展 教科書に載った文豪

# 芥川龍之介

田端の「我鬼窟」書齋にて1921年（南部修太郎撮影）日本近代文学館提供

2013年9月21日[土] - 10月19日[土]

桐蔭学園メモリアルアカデミウム ソフォスホール

■開館時間 10:30-17:30（入館は17:00まで） ■休館日 日・祝（ただし9/22は開館、9/25,26は休館） ■入場無料  
※9/21,22は学園祭開催のため、開館時間が9:30-16:30（入館は16:00まで）となります。

■主催 学校法人桐蔭学園 ■共催 公益財団法人神奈川文学振興会・県立神奈川近代文学館

■協力 京都大学附属図書館、郡山市こおりやま文学の森資料館、さんけい、藤沢市文書館

お問い合わせ先：桐蔭学園メモリアルアカデミウム 神奈川県横浜市青葉区鉄町1614 TEL.045-975-2100 <http://toin.ac.jp/ma/>

バスでのご来場をお願い申し上げます。

東急田園都市線 市が尾・青葉台各駅、または小田急線柿生駅から桐蔭学園行きバスで約15分



MEMORIAL ACADEMIUM



桐蔭文学展

教科書に載った文豪

# 芥川龍之介



「羅生門」(復刻版)



「羅生門」執筆の頃の芥川龍之介 (1915年) 日本近代文学館提供

「桐蔭文学展 教科書に載った文豪 芥川龍之介」によせて

桐蔭学園理事長 平岩 敬一

うだるような酷暑が過ぎ、初秋の風が湿度を和らげています。書に親しむのにふさわしい季節となりました。今秋の企画展では「桐蔭文学展」と題し、芥川龍之介を取り上げます。

芥川龍之介の代表作の一つで、題材を『今昔物語集』から求めた「羅生門」は、現在、高等学校の国語の教科書で最も掲載されている小説です。日本の少女少女たちのほとんどが、十代半ばまでに芥川龍之介という作家と出会います。

龍之介は一八九二年に東京市京橋区(現在の東京都中央区)に生まれました。小学校時代の龍之介は、友人たちと回覧雑誌「日の出界」の主筆として編集に携わるなど、のちに作家として大成する才能の片鱗をのぞかせていました。

自著「文学好きの家庭から」に、「父母をはじめ伯母も可成文学好き」だったため、「文学をやる事は、誰も全然反対しませんでした」とあるように、高等学校を優秀な成績で卒業後、東京帝大の英文学科へ進学しました。在学中、菊池寛らと創刊した第四次『新思潮』に「鼻」を掲載、夏目漱石からの惜しみない称賛を受け、新進作家として文壇にデビューしました。

龍之介は、人間の心理の奥深い部分を鋭く描写した短編小説を発表していきます。しかしその作家人生は十数年ほどで幕を閉じます。一九二七年七月、三十五歳という若さでこの世を去りました。晩年に近い作品や遺稿には、龍之介の苦悩が投影された作品も多く、穏やかな水面が波立つような読後感を覚える読者も多いのではないのでしょうか。

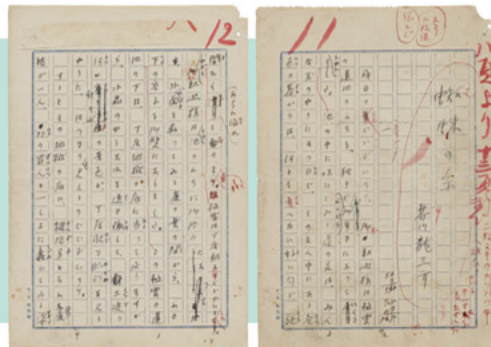
繊細がゆえに精神も徐々に蝕まれる一方で、そのような自己と対峙し続けた龍之介は、現代に生きる私たちへのメッセージとも受け取れる印象深い文言を多く残しています。

「人生は一箱のマツチに似てゐる。重大に扱ふのは莫迦々々しい。重大に扱はなければ危険である。」(『侏儒の言葉』より)

本展開催にあたり、神奈川県近代文学館をはじめ、ご指導ご協力を賜りました所蔵機関および関係各位に厚く御礼申し上げます。



芥川龍之介 4歳の頃 (1896年頃) 日本近代文学館提供



「蜘蛛の糸」原稿(複製) 原本・神奈川県近代文学館蔵



### <各駅からのバスのご案内>

- 東急田園都市線 青葉台駅よりバス  
「桐蔭学園前」行、終点。または「市が尾駅」行、「桐蔭学園前」下車
- 東急田園都市線 市が尾駅よりバス  
「桐蔭学園前」行、終点。または「青葉台駅」行、「桐蔭学園前」下車。または「柿生駅北口」行、「桐蔭学園入口」下車
- 小田急線 柿生駅よりバス  
「桐蔭学園」行、終点。または「市が尾駅」行、「桐蔭学園入口」下車

### <タクシーご利用の場合>

東急田園都市線 青葉台駅、または小田急線 柿生駅から便利です。行き先は「桐蔭学園 鉄(くろがね) 神社前」とお伝えください。※駐車場はございませんので、お車での来場はご遠慮ください。

芥川龍之介が小学校時代に主筆・編集した回覧雑誌「日の出界」臨時発行「お伽一束」の表紙(右)と、RA生というペンネームで執筆した「な・しぐさ」(左) 藤沢市文書館蔵



MEMORIAL ACADEMIUM